

# 十年の歳月をかけ 五百羅漢の彫刻を彫りあげる

## 釈迦堂にある 五百羅漢の彫刻

江戸末期、安政5年に(一八五八)建立された釈迦堂(かつての本堂・国の重要文化財に指定)の伽藍の堂羽目に五百羅漢の見事な彫刻がはめられていた。

門前町の人々には、自分の愛する人や家族を失って悲しみにくれているとき、釈迦堂に参り、五百羅漢を見ると、そこに亡くなった肉親生き写しの顔や姿を見出すことができる、といった言い伝えがあった。

羅漢は解脱を目指す最高の修行者の像で、俗界のしがらみに生きる人間ではない。しかし、人々は羅漢に死んだ人の姿を見出し魂の安らぎを覚えるのであるとか。

この彫刻を完成し、若くして名人とたたえられ、老いては不動金兵衛と呼ばれた松本良山は、清貧と数奇の中に波乱に富む生涯を送った。

## 松本 良山(まつもと・りょうざん)

京都で仏師の修業を積み、江戸で板彫りの名人に弟子入りをする。江戸の絵師狩野一信の下絵を元に、十年の歳月をかけ五百羅漢(新勝寺釈迦堂の堂羽目)の彫刻を彫る。

江戸の仏師と呼ばれるようになった良山は、船橋市港町に生まれ、名を金兵衛(一説には松吉)といった。

当時、港町に松本三五郎という漁師がいたが、江戸神田に出て、仏具商を営むようになった。夫婦の家業は順調に進んでいったが二人の間には子どもがなく、金兵衛を養子にもらうことになった。

金兵衛が13歳となった文化10年(一八一三)の春に、三五郎夫婦の間に男の子が出生し、弁次郎と名がつけられた。弁次郎が生まれると、平和な三五郎の一家に異変が起こった。

同年3月半ば、遊びに出たままの金兵衛は夕方になって帰毛せず、隣近所の者が周辺くまなく探し求めたが何

の手がかりもなく、一家は悲嘆にくれていた。しかし、金兵衛の行方は杳として知れず、近所の人々は、金兵衛は「神隠しにあつたのだ」と慰めながら、探索を続けていた。

そのころ、金兵衛は、日本橋から伊勢参りの人や上方に行く人々に現地の事情を聞き、自分も仏師になりたいという希望からその一隊に交じり京都へ



五百羅漢の完成を記念して自ら奉納した「出山の釈迦像」



釈迦堂と大塔(右奥)

と向かっていった。そのころ京都四条寺町に14代も名人ばかり続いたという山本茂祐という大仏師がいた。

かねて仏師になりたいという夢を持っていた金兵衛はこの膝下に弟子入りの願いを果たし、辛苦の中に、十年間の修業を続けた。たまたま、師匠が病気の折、金兵衛が注文の品を代作したところ、お得意様から大変ほめられたことから、日ごろの精進を認めていた金兵衛に「良山」の号を与えたのである。

## 本所で 板彫りの研究

修業を積んだ良山は23歳の春、江戸へ帰った。

良山はしばらく父三五郎の家にはいたが、江戸本所に板彫りの名人として有名な、後藤弥太郎の弟子となり板彫りの研究に没頭した。

京都で学んだことに加えて、彫りの深い立体的な技法をとらえた良山の作品は、江戸でもその評判を高めていった。このころ良山は自分より2歳年上のそめと結婚し、本所に居を構えた。



五百羅漢の彫刻 日本堂（現釈迦堂）羽目板8枚の内

28歳のときである。

この地で良山は、天保、弘化、嘉永の時代を経て25年、俗にいう「怒り物」を得意として、不動様、動物、殊に大黒様などの作品を手がけていった。やがて良山は、神田弁慶橋に移り、同じ神田の鍛冶町に住む高橋宝山、於玉ヶ

池に住む高橋鳳雲と並んで仏師の三名人（中村薫著「神田文化史」）といわれ、大名や豪商の注文も受けるようになっていた。しかし、本人は依然として職人氣質で、楽な生活ではなく、夫婦の間に子どもがないことから、常に酒をたしなみ、自分は仏師であり、職人である、金に心を奪われることは職人の恥であるといった独特の気質があった。

### 一世一代の仕事が持ち込まれる

嘉永6年（一八五三）ペリー率いる黒船が来航、江戸は大騒動となった。この年、良山には生涯忘れられないことが起こった。

江戸の有名な絵師、狩野一信が、新勝寺の本堂を造るに際し、五百羅漢の下絵を一信が書き良山が彫刻するという二世一代の仕事を持ち込んだのである。

そのころ、狩野一信は芝に住み、將軍家の御絵師として、狩野派の一家を成していた。

「このたび、下総の成田山で、御本堂造営が決まり、そのうちの堂羽目に五百羅漢を板彫りにして造ることになった。成田山も急いでいる話なので、ぜひ引き受けてはくれまいか。私も京都にたくさんのお五百羅漢を見たが、今度は一世代の力作を残してみたい」

という一信の言葉に良山は、一度は辞退したものの、またとない仕事と引き受けることとなった。このとき、狩野一信38歳、松本良山53歳、共に男盛り、熟年の境地である。

### 大野屋旅館に泊り彫刻に没頭

同年11月、良山は妻そめと弟子3人を同道して、成田山の門をくぐった。この日から十年、良山は自分のすべてを五百羅漢に注いだ。一方、妻のそめは夫の作業の完成を祈って、その日から一日もかかさず水行を始めた。

良山は門前の大野屋旅館の離れを借りて、仕事場には鍋店酒造の酒蔵の一隅が使われたという。

しかし、長期にわたり根気と才能が必要とされる作業、ときに一信と良山の間にも衝突が起こった。

良山は、一信の下絵（成田山保存）には厚みがなく、羅漢の表情がわからないと言い、良山が下絵にはない部分を勝手に作ったと一信は怒った。

また、良山も仕事に行き詰まり、江戸へ帰ろうとしたこともあった。しかしその途中、夕立にあって辻堂で休んでいると、目の前に蜘蛛が巣を張っていた。蜘蛛が風で破れた巣を懸命につくろっている、また風に破られる。この繰り返しをしながら、やがて蜘蛛は巣を元通りに完成した。良山は「人は

の仕事も蜘蛛の仕事も同じことではないか、苦難の中の繰り返しである」ということを蜘蛛に教えられたのである。（石橋徳也賞書「成田史談31号」）

### 仏師最高の地位「法橋」に

仏師の大川運一（東京芸大卒、彫刻界で活躍。八日市場市名誉市民・平成4年没）は、良山晩年の大作について「良山は、京都の修業を通して非常に刃のきれいさを学んでいる。私は、ベートーベンの交響曲第5番『運命』を聴くのが楽しみの一つであるが、その中のダダダダーン、ダダダダーンという出だしがあるが、あの繰り返しのようなものが、良山の作品にある。それにしても本堂の五百羅漢、それは良山の努力が実を結んだのです」と語っている。

この仕事を通して多くの称賛を得た良山は、仏師として最高の地位「法橋」（もとは僧侶の位、のち仏師、絵師にも賜る）に叙せられた。

明治5年（一八七二）良山は72歳で生涯を閉じた。東京谷中の観智院に妻そめと小さな墓が二つ並んでいる。そして船橋市本町には、「木造稻荷神立像」の彫刻（同町大野富雄管理、連絡先船橋市教育委員会）が保存されており、同町内不動院には、松本良山らの墓碑が建てられている。（文中敬称略）